

「他者との共生」再論：多文化共生・ノーマライゼーションの批判的検討を通して

プロジェクトメンバー：猪瀬浩平*、高桑光徳、植木献、可部州彦（*：代表者）

「多文化共生」や、「ノーマライゼーション」という言葉が、様々な文脈で語られるようになった。しかしこれらの言葉は、時に、多数派にとって都合のいい形で少数者を受け入れる側面を持つことがある。「他者」を己の都合で一元的に理解するのではなく、具体的な生活の現場の中から捉えることが重要である。それはとりもなおさず、他者と共にあるものとしての「自己」を、反省的に問い直すことでもある。

本プロジェクトは上記問題意識に基づきながら、障害者や在日外国人、難民、生き物を取り巻く状況に焦点を置き、言説と日常実践の双方の調査・分析を通じ、日本社会における「多者との共生」の実像を探るものである。言説分析については、特に他者を歓待する宗教的規範や倫理との関係に焦点をあてて考察する。日常実践の分析については、当該分野の実践者や研究者への聞き取り（含む研究会の開催）を行うと共に、実践現場でのフィールド調査を行う。これまで「他者との共生」が語られる文脈で見過ごされてきた、言説や実践の再評価を合わせて行う。

今年度は食の神学の可能性について検討している植木を新たなメンバーに加え、「宗教」や「食」、「家畜」といった軸を新たに加えた。また「内なる国際化」サティフィケート科目として2017年度に開講するボランティア学7・8「共生論の再検討」（担当 猪瀬・可部）の授業開発を行い、昨年度の研究会に参加いただいたゲイ・アクティヴィストで文化人類学者の砂川秀樹氏、難民を雇用する会社を営む山本浩史氏、障害者の地域生活運動に取り組む吉田弘一氏などをゲストスピーカーとする授業を春学期に行い、研究成果の学生へのフィードバックをおこなった。

11月17日には、可部氏と認定NPO法人難民支援協会等の支援を受け、難民に対する就労準備日本語学習教室をボランティア学8履修学生と訪問した。学生自身が難民とコミュニケーションをとり、日本における生活の状況や課題についての聞き取りを行った。聞き取りの成果を踏まえて、ボランティア学8の授業では、明治学院大学の学生として実施可能な難民支援プロジェクトを検討し、プロジェクト案についてのプレゼンテーションを行った。12月15日には、民族学校に子どもを通わせる金範重氏から、朝鮮学校の歴史、および地方自治体による補助金打ち切りをめぐる状況について聞き取りを行った。その後、1月12日には金氏にコーディネートいただき、埼玉朝鮮初中級学校にボランティア学8の履修者有志と訪問予定である。

一連の活動を通じて、難民や在日朝鮮人が日本社会で直面する問題についての学生の知識がどの程度であるか把握すると共に、理解を深めるために必要な教育プログラムが如何なるものなのかについての検討を行う。

なお1月16日には、家族経営で牛の飼育から屠畜、精肉までやっていた精肉店の閉店までを追ったドキュメンタリー映画である『ある精肉店のはなし』を上映する研究会を実施予定である。